

奈良・平城宮跡
へいじょうきゅう

- 1 所在地 奈良市佐紀町
- 2 調査期間 一 二〇〇五年(平17) 一月、二 二〇〇六年一
 二月～二〇〇七年五月
- 3 発掘機関 奈良文化財研究所都城発掘調査部
- 4 調査担当者 一 代表 岡村道雄、二 代表 川越俊一
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 一 中世～近世、二 古代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

一 第三八五次調査

特別史跡平城宮内の西北地域における個人住宅の現状変更に伴う調査。調査面積は四^二m。溝ないし苑池の一部を確認した。堆積土には中世から近世にかけての瓦、陶磁器片を含む。木簡もその堆積土から一点出土した。

二 第四〇六次調査

東院と東区朝堂院区画の間の一画(東方官衙地区)の構造を把握するための調査である。奈良文化財研究所では、この東方官衙地区を四回にわけて試掘的な調査区を設定して調査を行なうことにより、今回が一回目の調査である。調査区は東方官衙地区の北端で、

南北一二一m東西一〇一m(幅はそれぞれ六m)の逆T字形を設定した。調査面積は一二九六^二mである。検出した遺構は、築地回廊、掘立柱建物二棟、礎石建物四棟、築地塀三条、溝三条などである。

東方官衙地区中央を南流する南北基幹排水路SD二七〇〇(東大溝)の東には東西約五〇m、南北一二〇mの区画がある。この区画は、北に礎石建ち大型基壇建物SB一九〇〇〇(基壇高は少なくとも一・八m南北長二七・二m)を配し、その南に桁行一〇間以上の南北棟礎石建ち基壇建物SB一八九八〇・SB一八九九〇が対称にあった。また、SB一八九九〇とSD二七〇〇の間には築地塀SA一五二〇があった。SD二七〇〇の西側では、二面廂をつけた梁行二間、桁行二間以上の礎石建ち南北棟建物SB一九〇一〇を検出した。木簡は、SD二七〇〇から四五三点(うち削層三九九点)が出土した。

SD二七〇〇は幅約三・五m深さ約一・一mを測る。溝の埋土は上中下の三層に分けられ、砂礫を主体としている。奈良時代の溝にあたるのは中下層。西岸には護岸を伴う。二時期ある。当初の杭は痕跡のみ。その後、やや西側にヒノキ丸杭を並べてうちこむ。改修後の裏込には瓦が詰められ、そこに含まれる軒瓦から養老五年頃(天平初頭以降)に改修されたと考えられる。東岸は素掘りのまま。木簡は主に中層から下層にかけて出土した。なお、「主水司」の墨書のある須恵器杯、「美濃」刻印をもつ須恵器杯なども出土している。

(17) □□宿
□宿祢

(18) 留部

160

161

(1)は東肩出土。上下両端及び左辺削り、右辺割れ。左弁官からの口頭命令を木簡に記述したもの。左弁官からの命令をいずれかの省の大輔が受け、さらにその大輔が大蔵某に伝達した。内容は御在所に関わるものである。横材木簡を割った後、左弁官の宣が記される。最後は天地逆の習書木簡として利用し、廃棄された。(2)は上端切断下端及び左右両辺割れ。下層出土。中務省の下部官司である右大舍人寮からの文書木簡。(7)は上下折れ、左右割れ。東肩出土。「少主鑑」は中務省の下部官司である内蔵寮と、大蔵省に配置された官人。

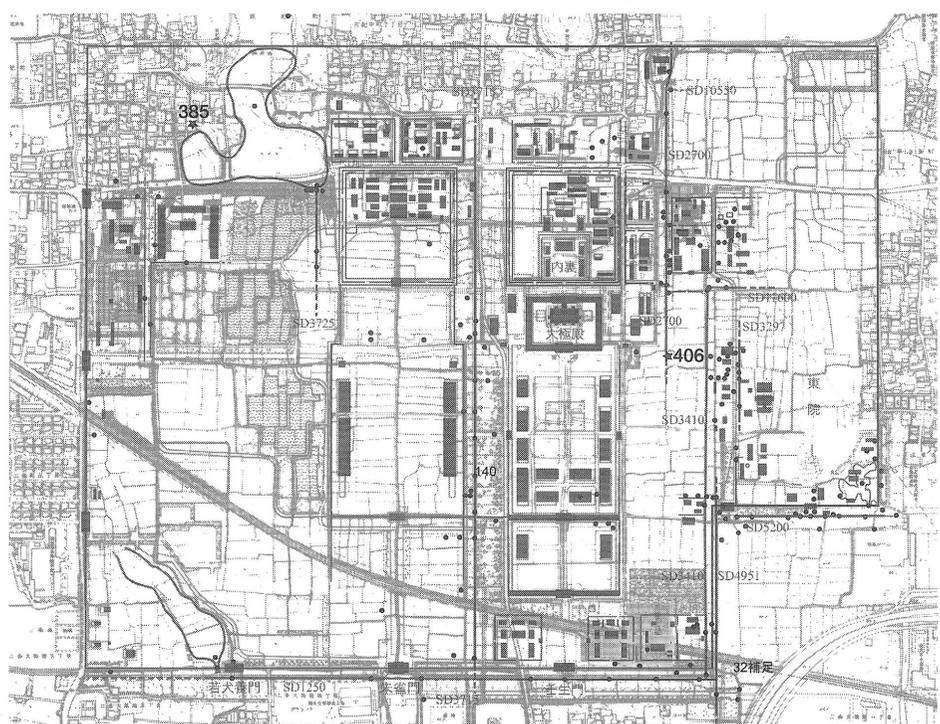
9 関係文献

奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要二〇〇五』(二〇〇五年)

同『奈良文化財研究所紀要二〇〇八』(二〇〇八年)

同『平城宮跡発掘調査出土木簡概報』三八(二〇〇七年)

(浅野啓介)



平城宮跡発掘調査地点図